

それがとても重要なのだが、その際には「そもそも経験というものはいかにして作動しているのか」という一般的な問題は手^口のすのままにとどまる。これに対して現象学は、世界と私の関係を根底から説明するために、むしろそのような一般的な問題に取り組むとするのである。

では、経験の仕組みを根底から明らかにするために何をすればよいのだろうか。——このあたりから、パソコンと経験のアナロジーが通用しなくなってくる。パソコンの仕組みを根底から明らかにするために、パソコンの電源をオフにして、カバーを外して内部構造を調べてみるのがよいだろう。さらに言えば、パソコンが不調をきたす前にパソコンの作動を一時停止するのは、パソコンとは別の存在者（使用者や点検業者）だろう。

しかし経験には、そもそも作動状態を全面的にオフにするためのスイッチはついているのだろうか。さらに言えば、仮にそのようなスイッチがあるとしても、そのスイッチを押すことができるのは誰なのだろうか。

こうした問題を解決するために、フッサールは、超越論的還元という手続きを考案する。それはいわば、作動状態の経験を全面的に停止したうえで、その経験の内部構造を調べるの系統きなものである。とはいへ、いきなりその話を始めるのは得策ではないだろう。むしろまず、停止される前の経験がどのようなものかを確かめておく必要がある。

私たちは、目が覚めてから眠りにつくまで、たえずさまざまなことを経験している。経験は、私たちの生のなかに時たま入り込んでくるような特別な出来事ではなく、むしろ睡眠や空想などによって中断しなにかぎり進行していくような日常的な出来事であると云ってよい。

私たちはそのような経験の進路を決めるために「身を入れて」生きることもできるが、そのように主体的な姿勢をとらなくても半ば自動的に経験を進行していく。だからこそ私たちは、経験の流れに「身を委ねて」生きることもできるのである。いずれにせよ、私たちがまずから、生を織りなす経験を、ごく当然のこととして素朴に生き抜いている。(1)

ここで「素朴（ナイーブ）」という言葉が意味しているのは、まだ批判的な検討を受けていないということである。知を愛し求めるあまりに何事にも批判的な検討をするのが哲学の基本姿勢なので、哲学の思考は、素朴な生から一旦距離をとること始まる

と言えよう。ただし、素朴であるということは決して悪いことではない。思考によってそこから一時的に離れることができたとしても、最終的に立ち戻るべきはやはりこの素朴な生なのである。(2)

では、素朴な経験において、私たちは何を無批判に受け入れているのだろうか。端的に言えば、それは、世界が存在するということだろう。私たちが経験しようとしてまいと、世界やそこに属するさまざまなものは、とにかく存在している。だからこそ私たちは、それらのものについて経験することができるのである。(3)

例えば、窓の向こうにリンゴの木が見えるのは、窓の向こうにリンゴの木があるからである。リンゴの木が見えるという経験が成立する理由は、実際に窓の向こうにリンゴの木があるからであり、要するに「リンゴの木あってその経験」なのである——口に出すものとはばかれるほどに当たり前なこうした信念に支えられて、私たちは日々の生活を送っている。ただしこの信念には、後ほど疑義が呈されるのだが。(4)

ひとまずフッサールは、このような信念のもので営まれる素朴な経験のことを「自然的経験」と呼んでいる。したがって、ここでの「自然的」という言葉は、「素朴な」とほぼ同義であると考えてよい。それゆへ自然的経験は、自然科学のいう意味での「自然」だけに関わるわけではない。例えばリンゴの木という自然物がそれ自体で存在していることを素朴に受け入れることが自然的経験であるのと同じように、机という人工物がそれ自体で存在していることを素朴に受け入れることも自然的経験なのである。

(5)

まず確認しておきたいのは、経験は、絶対に間違えることがありえないような無敵のはたらきではないということだ。たしかに経験は、何がどのように存在しているのかを私たちに否認なく思い知らせ、それによって私たちの知識を基礎づける。しかし、この基礎は、一度与えられたら絶対に揺るがないようなものではない。(6)

実際のところ私たちは、何が経験されているのかを時間をかけて徐々に明確化していくことがあり、その過程のなかでしばしば当初の勘違いに気づくこともある。経験は「瞬時に決着がつく出来事ではな時間的なプロセスであり、しかもそのプロセスのなかでは、「ちょっと間違えてました」や「ぜんぶ間違えてました」といった修正が入る可能性がある。このとき、それまでの経験は

勘違いであったことが判明するのである。

そのような勘違いは、日常生活のなかで無数に起こりうる。例えば筆者は、スティック糊と間違えてリップクリームを生懸命封筒に **C** ていたことがある。この目で確かめて糊を手にしたと思っていたのだが、それは筆者の勘違いだったのである（逆にスティック糊を唇に塗らずに済んだのは不幸中の幸いだった）。しかしせっかくなら、筆者の話よりもっと愉快な例を挙げたいので、以下では江戸時代の滑稽本の傑作、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」を取り上げてみよう。

この本のなかで、伊勢神宮に向けて旅をする弥次郎兵衛と喜多八（北八）は、道中でさまざまな勘違いをする。浜松の宿では、喜多さんが幽霊を見たと言い出して弥次さんを癒え上らせるが、後になって軒端に干してある襦袢を幽霊と見間違えていたことが判明する。これは先行する **i** 経験が後続する **ii** 経験によって訂正される一例である。

また翌朝には、喜多さんが茶店の前にはた餅を見つけてかぶりつくが、じつはそれが木でできた尻本であったことが判明する。この場合は、先行する **iii** 経験が後続する **iv** 経験や **v** 経験によって訂正されていると言えよう。

弥次さんも喜多さんも **い** からは勘違い人であり、愛すべき素朴で旅をしている。したがって道中の彼らの経験は自然的経験であると言って差し支えないだろう。しかしこの自然的経験においても、すでに経験の重要な性質を指摘することができる。それは、経験が志向性をもつということだ。

志向性というのは、私が何かを経験したり空想したりするとき、その何かと私のあいだに成り立っている関係性のことである。私の経験や空想は必ず何らかの対象（例えばリンゴの木やはた餅）についての経験や空想であって、いかなる対象も **D** ない経験や空想は考えられない。そのようにして私が経験や空想において何かの対象に向かってるとき、経験や空想は、その対象への志向性をもつと言われる。

志向性によって何かに向かうことは、物理的に何かに向かうことは異なっている。フッサールはこの違いを「意識」の有無として理解した。例えばボールを壁に向けて投げるとき、ボールは、たしかに物理的に壁のほうに向かっていく。しかしボールは、おそらく壁についての意識をもっていないだろう。他方で私たちは、経験において「目の前に壁がある」と意識することもできるとのである。

志向性は、経験や空想のほかにも、私の遂行するさまざまなはたらきに帰せられる。例えば、かつてあったことを思い出すという意味での想起は過去の対象への志向性を有しており、これからありうることを推測するという意味での予期は未来の対象への志向性を有している。また、聞き慣れない言葉を耳にしてそれが何かを——具体的な内容はわからないけれど、とにかく何かを——表現していると思ふとき、すでに私の意識には、その不特定の何かへの志向性が生じていると言えよう。

こうした志向性の諸形態については、経験の分類を示すときに再び触れることになる。さしあたりここで確認しておきたいのは、志向性が私の及ばずさまざまな心のはたらきに帰せられること、そしてそれが経験にも **E** ているということだ。

③ ．先ほど例に挙げた喜多さんの経験のプロセスも、志向性に沿って記述できるだろう。夜中の宿屋で震えあがっている喜多さんに何が見えるかと尋ねれば、「白いものが立っぺいらあ」と答えるだろう。そして翌朝の茶店で立ち止まった喜多さんに何が見えるか尋ねれば、「うまさうなはた餅がある」と答えるだろう。つまりこれらの状況において、喜多さんの視覚経験は、白く浮かび上がった幽霊や美味しそうなはた餅への志向性を有しているのである。そのような志向性が成立することによって、喜多さんに対して幽霊やはた餅が現れ、喜多さんはそれらについての意識をもつ。

④ ．喜多さんの経験の進行において、幽霊やはた餅だと思われていたものは、やがて襦袢として、あるいははた餅の看板（本菓の食品サンプル）として捉えなおされる。ただし喜多さん自身も気づいているように、このとき外界のほうに決定的な変化が生じたわけではない。

幽霊が襦袢に姿を変えたわけではないし、茶店の主人がはた餅と看板を入れ替えたわけでもない。**⑤** ．変わったのは喜多さんの志向性のほうである。勘違いに気づく以前の喜多さんの経験においては、幽霊やはた餅への志向性が成立していた。しかし勘違いに気づいたあとには、かつての志向性は撤回され、新たに襦袢や看板についての志向性が成立する。このように志向性は、

錯覚（勘違い）や、その錯覚の訂正について説明するときにも有効なのである。

このように、志向性とは、私と現れるもののあいだに成立している関係性である。ここで何気なく「現れるもの」という言葉を用いたのだが、今後の議論のために、さらに言葉づかいを明確にしておく必要がある。注意すべきは、「現れ」と「現れるもの」は区別できるとのことだ。

この区別について、引き続き喜多さんの経験を例に **F** つつ説明していこう。幽霊とぼた餅を一緒に論じるのは少々大変なので、以下ではぼた餅のほうに焦点を当てることにする。

喜多さんが見たと思っていたぼた餅は、あとから看板であったことが判明するのだが、少なくとも最初はぼた餅が喜多さんの目の前に現れていた。ここで一時的に喜多さんにはぼた餅の存在を信じさせるに至ったものこそが、ぼた餅の「現れ」である。それはおそらく、黒くて丸いかたちに見えるような視覚的な現れだろう（なお、「現れ」は視覚的なものに限らず、聴覚的なものや触覚的なものでもありうる）。

そのような現れは「現れるもの」から区別されねばならない。なぜなら、現れの数がどれほど多くても、それらを通じて現れるものは一つでありうるからだ。

茶店の座席に置いてあるものをいろいろな角度から眺め回せば、それに応じてぼた餅はさまざまな仕方で見られる。しかし残念ながら、現れをいっただけでいっても、現れるもの（ぼた餅）の数を増やすことができるわけではない。

また目下の例においては、**X**。視覚的にはぼた餅の現れにしか見えなかったものは、かぶりついでみたら硬い感じがするという経験や、舌でなめてみても味がしないという経験を通じて、あとからぼた餅の食品サンプルの現れとして捉えなおされる。

⑥ 目下の場合においては、視覚的な現れ（黒さ、丸さ）や、触覚的な現れ（硬さ）や、味覚的な現れ（味気なさ）が組み合わせられ、それらを通じてぼた餅の食品サンプルが現れるに至るのである。

Y は一つの「現れるもの」に向かっているが、そのような関係性は、無限に多くの「現れ」を通じて成立してい

る。だからこそ、現れの捉え方が変わったり新たな現れが追加されたりすれば、それに応じて、現れるものは変化しうる。

鈴木泰志著「フッサル入門」（ちくま新書）から

問一 次の文は（1）～（6）のどの段落の後に入っていたものか、最も適当だと思うところを選んでマークせよ。

この自然的経験にとどまっている状態においても、私たちは、経験とはどういうものかがある程度まで論じることができるといえる。

問二 空欄 A～F には、次のどの動詞の活用形を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ動詞を二度用

いてはならない）。

1 挙げる 2 起きる 3 顧みる 4 備わる 5 塗る 6 もつ

問三 空欄 ①～⑥ には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ言葉を二度用いてはならない）。

1 したがって 2 すると 3 そもそも 4 ただし 5 ところで 6 むしろ

問四

傍線 イ〜ホ の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- イ 喫緊の—— 1 急務の 2 重大な 3 心身の 4 贅沢な 5 身近な
 口 手つかずのままに—— 1 勝負できないままに 2 誰もできないままに 3 誰も何もしていない状態で

4 手におえない状態で 5 手を出してはいけない状態で

- ハ 生を織りなす—— 1 人生が複雑に絡む 2 人生に彩りを与える 3 人生をつくりあげる 4 生にこだわる

5 生を共に歩む

- 二 端的に言えば—— 1 換言すると 2 詳述すると 3 少なくとも 4 付度すれば 5 要するに
 ホ 否応なく—— 1 有無を言わず 2 簡単に 3 知らぬ間に 4 確かに 5 無視されても

問五

空欄 1〜v にはそれぞれどの言葉を入れるのが最も適当か、適当な組み合わせを一つ選んでマークせよ。

- 1 i 視覚 ii 視覚 iii 視覚 iv 触覚 v 味覚
 2 i 視覚 ii 触覚 iii 視覚 iv 触覚 v 味覚
 3 i 触覚 ii 視覚 iii 触覚 iv 視覚 v 味覚
 4 i 触覚 ii 味覚 iii 視覚 iv 味覚 v 触覚
 5 i 味覚 ii 視覚 iii 味覚 iv 視覚 v 触覚

問六

傍線 あ の説明として、最も適当なものを一つ選んでマークせよ。

- 1 パソコンでの経験が生かせなくなる
 2 パソコンと人生の類似性がなくなる
 3 パソコンに例えて経験について説明できなくなる
 4 パソコンの仕組みが複雑になつてくる
 5 パソコンのスキルが経験に勝る

問七

空欄 い には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせよ。

- 1 経験の記述 2 経験の進行 3 経験の進路 4 経験の重要な性質 5 経験の批判的な検討

問八

空欄 X には、次のどの文を入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせよ。

- 1 現れるものが、錯覚が訂正されたあとには別の現れとして捉えなおされている
 2 同じ現れが、錯覚が訂正されたあとには別のものとして捉えなおされている
 3 さざまな現れが、錯覚が訂正されたあとには現れるものとして訂正されている
 4 さざまな現れが、錯覚が訂正されたあとには同じ現れとして訂正されている
 5 別の現れが、錯覚が訂正されたあとには同じもの現れとして捉えなおされている

問九

空欄 Y には、どのような言葉を入れるのが最も適当か、本文より五字以内で抜き出せ。